

黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究

園田, 豊

<https://doi.org/10.15017/4742069>

出版情報：雅俗. 17, pp.41-51, 2018-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示

黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究

園田 豊

一、はじめに

論文名を「戯作者伊庭可笑」ではなく、「黄表紙作者伊庭可笑」としたのは、可笑は黄表紙しか書き残していないからである。一説には、黄表紙仕立ての落咄本を著したとも言われている^①が、現存するそれには、北尾政美という画工名は記されているものの、作者名は記されていない。よって、今回は可笑の署名のある作品のみをリストアップし、論文名を「基礎研究」とした。加えて、可笑の菩提寺である理性寺を訪ね、従来、定説を欠いていた可笑の生没年・享年を確定する事を試みた。結論を先に述べれば、可笑は延享三年（一七四六、没年より逆算）生まれ、天明二年（一七八二）六月三日に、享年三十七才で没したと思われる。

黄表紙は出版前年内に原稿が出来上がり、次いで、板下、板木作成、印刷、表紙・絵題簽を付し、翌年の正月刊行となるのが慣例である。

安永九年に二作を発表した可笑は^②、翌天明元年には十四作、二年には十一作と多作する。それが、三年には三作となる。この天明三年の三作は遺作ではなかったか。後述する資料に加えて、可笑の没年を天明二年と考える所以である。

二、没年・享年に関する諸説

ここで、可笑の没年・享年について、詳しく述べてみたい。従来、可笑の没年は天明三年とされてきた^③。それらの説の根拠となった資料について、以下に、その部分を抜粋して示す。

ア、石塚豊芥子編『戯作者撰集』^④

可笑 伊庭氏 猪与八と称ス

好て稗史著す天明三癸卯六月三日没す行年三十七才

四ツ谷大木戸理性寺ニ葬ル法号

玄如院要山

雪麻呂先生云

大木戸より右側にて日蓮宗法号玄如院要山日昭トアリ

寺僧云今の伊庭氏は小石川鷹匠町ニ住居ト云々

イ、木村黙老著『戯作者考補遺』（弘化二（一八四五）年成）

可笑 伊庭氏猪与八と称ス

好て稗史著す天明三癸卯六月三日没す行年三十七才四ツ谷

大木戸理性寺ニ葬ル法号

玄如院要山

雪麻呂先生云

大木戸より右側にて日蓮宗法号玄如院要山日昭トアリ

寺僧云今の伊庭氏ハ小石川鷹匠町ニ住居ト云々

ウ、岩本活東子編『戯作者小伝』（安政三（一八五六）年成）

可笑

伊庭氏、猪与八と称す、天明三癸卯年六月三日没す、行年七十

七^⑤、四ツ谷大木戸理性寺に葬る、

法号 玄如院要山

雪麿云、大木戸より右側にて、日蓮宗也、法号玄如院要山日昭と

あり、寺僧云、今の伊庭氏は小石川鷹匠町に住居すといへり、

以上、三つの資料を挙げたが、これらはすでに広瀬氏が考証される

ように^⑥、イトウはアを踏襲している事が、その文章からも明らかである。

三、論者の見解

これに対し、論者は以下の資料を提示したい。

老樗軒主人輯『江都名家墓所一覧 全』（文化十五（一八一八）年

刊）には、

称猪与八

大木戸

〔碑〕 伊庭可笑、

天明二年六月三日 理性寺

とある。

続いて、磯ヶ谷紫江「伊庭可笑の墓域に就て」（『墓蹟五号』墓蹟発

行所、一九二七年刊）に掲載されている過去帳には、

天明二壬寅^天（園田注、「年」の誤植か）

玄如院要山

伊庭惠兵エ子

とあり、また、移転墓石調簿には、

天保二年 伊庭猪與八

四十五 玄如院要日照居士

六月三日 峯田

俗名 伊庭猪與八

とある。この調簿について、紫江氏は「天保とあるは墓地にて寫しとりの時の誤りか、峯田とあるは臺石に刻んだ文字が（園田注、「か」か）、これにつき任職に尋ぬるも知らぬと云ふ」と付す。（「」は原本通り）

そして、論者が、理性寺の御住職から拝見した過去帳の写しを以下に示す。

戒名	死亡年月日	死亡者氏名	摘要
玄如院要山日照居士	天明二年 六月三日	伊庭猪与八 三十七歳	伊庭惠衛子息 劇作家堪亭可笑

まず、『江都名家墓所一覧 全』だが、これは可笑に最も近い時期に刊行されたものであり、また、紫江氏の資料は、直接、理性寺で調査したものである。更に、過去帳の写しは後年のものとは言え、前二資料の一つの証左となるであろう。

よって、論者は、可笑の没年を天明二年六月三日、享年三十七才と

するものである。

四、当時の黄表紙作品・評判記に現れる可笑

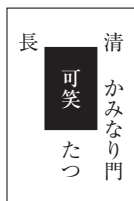
可笑の当時の活動や交友関係についての資料は決して多くないが、今、管見に入ったものを記しておく。

まず、大田南畝編『菊寿草』（天明元年刊）では『化物世櫃鉢木』が、翌年の同編『岡目八目』では『嘘から出た町人の男氣名高江戸紫』が巻軸とされるなど、黄表紙作者として、一定の評価を得ていたことが伺えよう。

次いで、山東京伝作画『手前存ござんせのしやほい商賣物』（天明二年刊）三丁オモテに、「つう笑丈可笑士のさくにもすごひのがあるて」とある。この「可笑士」について、水野稔氏が指摘されたように^①、可笑は士分であつたらうか。

また、恋川春町作画『浦島が歸郷八島の入水さるにかごとをいむかしばなし猿蟹遠昔噺』（天明三年刊）九丁オモテには、可笑が描かれる。（図1）

続いて、岸田杜芳作『繪艸紙年代記』（天明三年刊）二丁オモテ「目錄」の七番目に、



とある。本作の七丁ウラ・八丁オモテの見開きは、可笑作・清長画の風を模したものと思われる。

後年にも、式亭三馬作画『又焼直鉢冠姫稱史億説年代記』（享和

著作権保護のため図は非表示



図1 『浦島が歸郷八島の入水さるにかごとをいむかしばなし猿蟹遠昔噺』（国立国会図書館所蔵）八丁ウラ・九丁オモテ

二年刊)一丁ウラ「くさざうし戯作者名寄」に、「●可笑」の記述が見られる(●は故人を表す)。但し、「名作青本略記」(十五丁ウラ)(所謂「名作二十三部」)中には、可笑の作品は見られない。

五、作品リスト

次に、現在、論者の調査した可笑の作品をリストにして掲げてみた(稿末「伊庭可笑黄表紙一覽」参照)。

従来、可笑の黄表紙作品は三十四部⁸⁾とされているが、論者の調査したところでは、署名のあるものだけでも三十八部が確認できた。

六、小池正胤氏の論文

まこと先達はあらまほしきもの哉。可笑について、小池正胤氏が既に五十六年前に「伊庭可笑の黄表紙——安永・天明期の一系譜——」(『国文学 言語と文芸』四巻五号、大修館書店、一九六二年)という論文を書いておられる。その後、可笑についてのまとまった論文は無く、貴重な論考であると言えよう。第一章に取り上げられているのは、『化物世櫃鉢木』から『珍説雷婚禮』、『意福毛生太郎月』までの、所謂、黒本・青本の系統に連なる幼童を楽しませる作品であるが、注目を引くのが、第二章から第三章にかけて、『嘘から出た傾城の貞女名高江戸紫』、『交雑講釋』(仮題)、『甲州名橋鎌倉栄』の三作の五冊もの及び『敵討駿河花』、『敵討染分手綱』の二作の敵討ものについて、可笑の没後、南柚笑楚満人によって書かれた同種の作品と比較していることである。だが、結

論的には、

伊庭可笑と、南柚笑楚満人との間は、ただ作品の上で類似性が認められるだけであって、個人的に両者の関係を示すような資料は未見である。(以下略)

(寛政の改革の)その遙か以前より伊庭可笑・南柚笑楚満人などの手を経て、稚拙な絵解き玩具の黒本・青本は、いわゆる絵物語、絵入り小説としての結構を身につけてゆき、その結果がたまたま寛政の改革と合致して、(敵討もの流行の)展開に一層の拍車がかけられたのではなからうか。(以下略)()の中は園田注)

とされている。首肯すべき説であるが、これらの化物や五冊もの、敵討もののみで可笑の作品の全てを論じることが出来ない。作品リストからお分かりのように、それ以外にも、例えば町人もの、福神もの、通を扱ったものなど様々あり、その中には佳作も少なくないのである。

七、「なほかに極通人由来」について

「ロン論より證據シヤカコ兩國橋」(平賀源内『放屁論』自序、安永三年刊)。ということで、仮に「通人もの」に分類したことから、一作を紹介してみよう。天明元年刊「なほかに極通人由来」と題された作品である。これは、『菊寿草』では、「▲実悪之部」の中で「上上吉」の位に据えられている。南畝の評は後述することにして、まず、本作の粗筋を記す。

最初に天野幸介という人物が登場する。この男、「極めて大通人にしてしゃれのめし」遂に勘当の身となって、通人仲間の文里という者の許

に居候する。幸介（時夜九といふ俳名を用いている。以下「時夜九」は、大通人に満足できず、極通人になりたいと思案を重ね、その結果、大通になることこそが、通人の上をいくことに思い至る。

一方、友人の文里は大通人で、「諸事人の気に障らず、真に通り者の粹と言うは此男の事也」と言われる程の男である。その女房おとせも通人で、しかも大変な美人。

文里のもう一人の友人祇幸は、おとせの美しさに打ち込んでゐる。「お前ゆえに死んでも本望」とおとせを口説くが、おとせは直ぐに応じる訳にはいかない。それを偶然耳にした文里は（がたがた震えながらも）二人に見つかるまいと、その場から逃げていくのは「きつい通人」（通人はつらいよ、といったところか？）。その後も文里は、度々二人から逃げ続け、ある夜、祇幸に留守を頼み、時夜九と連れ立って北国へと出掛ける。一方の時夜九は、留守の二人が気に掛かり、今夜このまま遊んで帰っては通り者の様で嫌だと、茶屋より文里をまく。文里は、茶屋で時夜九の姿が見えず、また、（女房のことを気に掛けながらも）家にも戻らず、ここが通の肝だと、そのまま飲んでゐる。時夜九は急ぎ帰つてみると、屏風の向こうで、何と祇幸がおとせと同食してゐる。二人は文里へ言わないよう頼むのだが……。

翌日、文里が帰宅すると、時夜九はたまたらず、昨夜のことを夢に托して文里に話し、注意する。その夜、時夜九は近所の息子株と連れ立ち、新宿へ行くが、息子があまりもてるので、一晚中、話をして息子の邪魔をする。この位野暮になれば、大通人を通り越して極通人になつたらうと自惚れ、とろとろと寝入ると、夢中に毘沙門天が現われ、「お前のやつたことは不通でなくして、ただの意地悪である。通人にな

るのも入らぬもの、まっとうな人間になれ」と踏みのめす。「この時より意地の悪き者を天の時夜九と言ひ馴らわせしなり」と、黄表紙流のこじつけ語源説が入る。結局、文里は女房おとせを祇幸に遣り、その身は隠居同然に世を面白く暮らした。時夜九も毘沙門天の教えにまかせ、「通人でもなく真に本の人間」になつて、その後は皆仲睦まじく、目度度い春を迎えた。

以上、粗筋を述べれば、他愛のない作品であるが（これとて、黄表紙を評するに、褒め言葉となる）、本作の角書きに、「ほかにはなひぞや」とある通り、この作品以前に、かくの如き趣向の黄表紙のある事を知らない。黄表紙評価の一基準に「新しさ」を求めた南畝の、本作に対する評は以下の如く概ね好意的である（尤も、これは『菊寿草』『岡目八目』全体に見られる傾向であるが。しかし、そもそも好意的に評するに値しない作品を、どうして取り上げる必要があるか？）。評言を引用してみよう（一）の中は園田注）。

〔頭取〕此度天野幸介と成、極つう人とならんと大通の上を行、友だち文里が所にて長ばなしの所よし。（幸介の自惚れ振りが良く表現されている。）文里が妻はおとせ（「落とせ」「墮とせ」の意を掛けたか。）とて、扇屋の花あふぎもそののけ、はまむらや（歌舞伎俳優瀬川菊之丞の屋号）どつこいとおさへた評判出来ました。（おとせの美貌が具体的に描写されている。表現が類型的なのは、この時代の表現として当然のこと。そこが却つて分かりやすい。）夫より幸介はよしはらよりかへりに、うしろからくる人がてうちんをうれしがらうと、てうちんをふきけす所、こまかい。（極通人を目指す幸介の行為が、ここに端的に表されている。）新宿にて

むすこのもてるを見て、こゝはまたおきずばなるまいとのいひ分、にくていく（これも極通人を目指す幸介の行為をうまく表している。しかし、ここで）**あさぎ**草くさざうしは子供の見るもの、

祇公が間男をするを、文りがしらぬかほで、ついに女房をやるとはあんまりつまらぬ（と一応、人倫の常識を踏まえた一言を入れるのを忘れてはいない。だが、これによって、南畝個人の倫理観を云々する必要はない様に思う。あくまで、**あさぎ**の言葉としている点で。しかし、こうした言も、やはり必要であった。その上で）**頭取**夫故びしやもんのつけにも、通人になるもいらぬもの、大がいな人間になるべしと御座ります。

と、最後に、**頭取**に本作を擁護させて終わる。ここは、中野三敏氏の言われる「教訓の意を失わぬ作風はいかにも黄表紙らしく」⁹⁾、本作は後味の悪さが残る性質のものではないのである。そして、こうした作風は、可笑の全作品に通底していると言える。

八、今後の課題——可笑作品の翻刻と解題——

今回は基礎研究というテーマで論じたが、今後は、各作品について、翻刻・解題・注釈を試み、可笑の作品の全貌を明らかにしたい。

注

(1) 山崎麓『改訂日本小説書目年表』（書誌書目シリーズ⑥、ゆまに書房、一九七七年刊）では、『おとし菊壽盃』（二二三頁）、『唾玉のはる』（二二四頁）の作者を可笑としている。

(2) 棚橋正博『黄表紙總覽 前篇』（日本書誌学大系四八（一）、青裳堂書店、一九八六年刊、一八二—一八三頁）、『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞社、一九九四年刊、一八七頁）は、安永八年以前にも無署名刊行作がある可能性を指摘している。

(3) 『日本古典文学大辞典 第一卷』（岩波書店、一九八三年刊、二二一頁）。棚橋正博『黄表紙總覽 前篇』（注2に同じ）。『朝日日本歴史人物事典』（注2に同じ）。

(4) 本書の成立年について、広瀬氏は「天保の終り頃から弘化の初年頃にかけてはほぼ出来上がり、その後嘉永年間にまたがって随時増補加筆されて行ったと推察される」（広瀬朝光編著『戯作者撰集』（笠間書院、一九七八年刊、三五三頁）とする。

(5) 水谷氏『國書刊行會本「戯作者小傳」に七十七歳とあるが、上の七は三の誤植であらう』（『水谷不倒著作集 第二卷』（中央公論社、一九七三年刊、一〇六頁）に、論者も同意する。なお、國書刊行會本『戯作者小傳』とは、『燕石十種』所収のもの。

(6) 広瀬朝光編著『戯作者撰集』（笠間書院、一九七八年刊、三三三頁）。

(7) 水野稔校注『黄表紙洒落本集』（日本古典文学大系五九、岩波書店、一九五八年刊、九二頁、注二五）。

(8) 『日本古典文学大辞典 第一卷』（注3に同じ）。『朝日日本歴史人物事典』（注2に同じ）。

(9) 『朝日日本歴史人物事典』（注2に同じ）。

〈参考文献〉

- 岩本活東子編『戯作者小伝』（一冊、安政三（一八五六）年成、『燕石十種 第二卷』（中央公論社、一九七九年刊）
- 石井研堂編校訂『万物滑稽合戦記』（続帝国文庫三三、博文館、一九〇一年刊）
- 大久保葩雪『増補青本年表』（新群書類聚七、国書刊行会、一九〇六年刊）
- 森銚三『黄表紙解題』（中央公論社、一九七二年刊）

○森銚三『續黄表紙解題』（中央公論社、一九七四年刊）

○『青本絵外題集Ⅰ』（貴重本刊行会、一九七四年刊）

○山崎麓『改訂日本小説書目年表』（書誌書目シリーズ⑥、ゆまに書房、一九七七年刊）

○『板元別年代順 黄表紙絵題簽集』（書誌書目シリーズ⑧、ゆまに書房、一九七九年刊）

○『江戸の戯作絵本 続巻二』（社会思想社、一九八四年刊）

○『大田南畝全集 第七卷』（岩波書店、一九八六年刊）

○棚橋正博『黄表紙總覽 前・中・後・索引篇』（日本書誌学大系四八（一））

（四）、青裳堂書店、一九八六年～一九九四年刊）

〔付記〕 本稿は、第三十三回九州近世文学研究会における発表を元にしたもので

ある。発表に際して、天野聡一氏、板坂耀子氏、川平敏文氏、高橋昌彦氏、菱岡憲司氏から様々な教示をいただきました。記して御礼申し上げます。

図版については、国会図書館デジタルコレクションを利用させていただきました。御礼申し上げます。

又、末尾乍ら、貴重な資料を御提供下さいました理性寺御住職牧野秀成氏にも感謝の意を表します。

※1：『改訂日本小説書目年表』による。 ※2：『黄表紙總覽』による。

『菊寿草』 評あり：◎ 目録のみ：○	『岡目八目』 評あり：◎ 目録のみ：○	刊行年	翻刻 有：○	絵題簽 有：○	内容	備 考	底本 (底本にした所蔵館：底、底本を補った所蔵館：補)					
							国立国会 図書館	加賀 文庫	東京 誌料	松浦史料 博物館	大東急 記念文庫	頼原 文庫
		安永九	○	○	狐 通	絵題簽の意匠より安永九年刊。 袋入はその前年の安永八年刊か。	底	底		補	補	
		安永九		○	町人もの	絵題簽の意匠より安永九年刊。	底	底				
◎		天明元		○	朝比奈	新版目録付。		底		補		
◎		天明元		○	鼠合戦		底	底		補		
◎		天明元		○	昔話もの		底	底	底 ※1~5丁 のみ			
○		天明元	○	○	大津絵		底	底				
◎		天明元		○	敵討もの	新版目録付。	底	底			補	
		天明元	○		異類もの	『朝比奈唐子遊』新版目録に、「袋 入」の記述。	底	底				
◎		天明元		○	町人もの			底		補		
◎		天明元		○	通			底				
◎		天明元		○	敵討もの			底		補		
◎		天明元		○	異類もの			底				
◎		天明元	○	○	化物	『今昔化物親玉』の続編。後年、 『今昔化物親玉』と併せた『見越 入道一代記』及び『化物一代記』 が刊行。		底				
○		天明元	○	○	化物 風俗			底		補		
◎		天明元		○	天狗 医者		底	底				
◎		天明元		○	福神もの		底	底				
	◎	天明二		○	福神もの			底		補		
	○	天明二		○	敵討もの		底	底				
	○	天明二		○	町人もの			底				底
	◎	天明二		○	三娘子	清長画・重政画とする説(※1)。 新版目録付。	底					
	◎	天明二		○	通		底			補		
	◎	天明二		○ (文字題簽)	朝比奈	新版目録付。 『朝比奈唐子遊』後日譚。	底			補		
	◎	天明二		○	町人もの			底				
	◎	天明二	○	○	通		底					底
	◎	天明二		○	狐 町人もの			底		補	補	
	◎	天明二		○	敵討もの	後人の書入に「重政画」。 後年、「江戸紫二度色揚」と改題・ 改刻。底本は右の他、九大本も利用。		底				
	◎	天明二	○	○	昔話もの			底		補		
		天明三	○	○	上方と江 戸の風俗		底	底				
		天明三		○	異類もの		底	底				
		天明三	○	○	化物	後題簽に「重政画」。	底	底				

◇伊庭可笑黄表紙一覧◇

※作品の刊行年・五十音順に配列。

書名 ※() 付は仮題	よみ ※() 付は仮題	角書 ※() 内はルビ	作者署名	画工署名	板元	袋入(丁) 巻/冊
扱化狐通人	さてもばけたりきつね つうじん		可笑戯作	清長画	西村屋	袋入(十丁) 二/二
頓作間違矢口噂	とんだまちがいやくち のうわさ		可笑作	清長画	西村屋	二/二
朝比奈唐子遊	あさいなからこあそび		可笑作	画 清長 ※新版目録に拠る	西村屋	三/三
鶉の白拍子	うづらのしらびやうし	田鼠(てんそ) 化而(けして)	可笑作	北尾政演画	伊勢治	二/二
奥州晰	おうしうはなし	べにさら かけさら	可笑作	清長画	西村屋	三/三
大津名物	お、つのめいぶつ	東都(えど) 土産(みやげ)	可笑戯作	北尾政演画	岩戸屋	二/二
敵討駿河花	かたきうちするがのはな		可笑作 ※新版目録に拠る	画工 北尾政演 ※□は印「北尾」	岩戸屋	三/三
紙屑身上晰	かみくずみのうへはなし		可笑作	清長画	西村屋 ※新版目録に拠る	袋入 (十五丁)
毛生太郎月	けがはへたらうつき	豊福(ぶんふく) 茶釜(ちやかまに)	可笑作	清長画	西村屋	三/三
極通人由来	こくつうじんのゆらひ	ほかには なひぞや	可笑作	清長画	岩戸屋	二/二
古實家七加減	こじつけさじかげん		可笑作	清長画	西村屋	三/三
古呂利山榊味噌	ころりさんしょみそ	おめ で たい	可笑作	清長画	西村屋	二/二
化物世櫃鉢木	ばけものよつぎのはち のき		可笑作	清長画	岩戸屋	三/三
化物箱入娘	ばけものはこいりむすめ		可笑作	清長画	西村屋	二/二
初夢宝山吹色	はつゆめたからのやま ぶきいろ		可笑作	北尾政美画	岩戸屋	三/三
夢相大黒銀	むさうのだいこくぎん	福(ふく) 徳(とく)	可笑作	画工北尾門人 ※□は印「三二郎」	岩戸屋	三/三
祝増福壽相	いわいますふくじゆさう		可笑作	北尾政演画	岩戸屋	三/三
敵討染分手綱	かたきうちそめわけた づな		可笑作	北尾政美画	伊勢治	三/三
藝者五人娘	げいしやごにんむすめ		可笑作	清長画	西村屋	二/二
石千屋繁昌	こくせんやはんしやう	唐土魂(もろこしのたましい) 日本住(にっぽんのすまい)	作者 可笑 ※新版目録に拠る	なし	岩戸屋	三/三
七福人大通傳	しちふくじんだいつう でん		可笑作	北尾政演画	伊勢治	二/二
地獄沙汰金次第	ぢごくのさたもかねし だい		可笑作	清長画	西村屋	二/二
珍説雷姻禮	ちんせつつかみなりのこ んれい		可笑作	清長画	岩戸屋	二/二
通風伊勢物語	つうふういせものかたり	写(むかし) 昔(おとこを) 男(うつして)	可笑作	清長画	西村屋	三/三
冨多数寄砂	とんだすきさ	楽(たのしみ) 和(は)	可笑作	清長画	西村屋	三/三
名高江戸紫	なもたかきゑどのむら さき	嘘(うそ)から出た傾城(けいせい) の貞女(ていぢよ) 誠(まこと)から出た町人(てう にん)の男氣(おとこき)	可笑作	なし	岩戸屋	五/五
昔咄し虚言桃太郎	むかしはなしとんだも もたらう		可笑作	清長画	岩戸屋	三/三
御先餅下手横好	おさきのくせへたのよ こすき		可笑作	北尾政美画	松村	三/三
通人寶盡	つうじんたからづくし		可笑作	画工政美画	岩戸屋	三/三
化物仲間別	ばけものなかまわれ		可笑作	なし	岩戸屋	二/二

『菊寿草』 評あり：○ 目録のみ：○	『岡目八目』 評あり：○ 目録のみ：○	刊行年	翻刻 有：○	絵題簽 有：○	内容	備 考	底本 (底本にした所蔵館：底、底本を補った所蔵館：補)					
							国立国会 図書館	加賀 文庫	東京 誌料	松浦史料 博物館	大東急 記念文庫	額原 文庫
		不明		○	町人もの	安永八年刊(※1)。	底	底				
		不明	○	○	化物	後年、『化物世櫃鉢木』と併せた「見越入道一代記」及び「化物一代記」が刊行。 天明元かそれ以前刊とする説(※2)。		底				
		不明			狂歌	後人の手による書名。板元は葛屋とする説(※2)。 天明六年刊(※1)。				底		
		不明		○	敵討もの	『名高江戸紫』の改題・改刻。 「可笑」の署名はあるものの、刊行年・改刻の内容から、可笑作ではない。底本は岩瀬文庫。						
		不明	○	○	時代もの	再版有(西村屋)(※2)。 天明年間刊(※1)。		底 ※1～15 丁のみ	底		補	
		不明		○	累もの	安永九年刊(※1)。		底				
		不明			昔話もの	書名不明。柱題は「金」。 天明年間刊説(※2)。				底		
		不明			曾我もの	書名不明。柱題「にた山そが」。後人の手による書名に「今昔我面影」「是茂又似山曾我」等。安永八年刊(※1)。 板元は葛屋とする説(※2)。袋入とする説(※2)。	底		底			
		不明		○	化物	『今昔化物親玉』と『化物世櫃鉢木』を併せたもの。 「見越入道一代記」の改題再版とする説(※2)。 天明六年刊(※1)、享和二年刊説(※2)。	底					
		不明		○ (奥州源氏 忠臣録)	時代もの	後人の手による書名。後題簽に「重政画」。 天明元年刊(※1)。 『奥州源氏忠臣録』(五巻欠・葛屋・加賀文庫蔵)は、本書の改題・再版とする説(※2)、天明元年か、寛政年間以降刊説(※2)。	底	底				
		不明		○	化物	『今昔化物親玉』と『化物世櫃鉢木』を併せたもの。 天明二年刊説(※2)。				底		

『菊寿草』 評あり：○ 目録のみ：○	『岡目八目』 評あり：○ 目録のみ：○	刊行年	翻刻 有：○	絵題簽 有：○	内容	備 考	底本 (底本にした所蔵館：底、底本を補った所蔵館：補)					
							国立国会 図書館	加賀 文庫	東京 誌料	松浦史料 博物館	大東急 記念文庫	額原 文庫
◎		天明元		○	落晰	黄表紙仕立ての断本。 作者「伊庭可笑」(※1)。加賀文庫本は二冊。	底	底				
		天明三		○	町人もの	作者「伊庭可笑」(※1)。 後題簽に「可笑作」。	底				補	
		天明三		○	落晰	黄表紙仕立ての断本。 作者「伊庭可笑」(※1)。「北尾政美畫」(※1)。				底		

安永九：2作
天明元：14作
天明二：11作
天明三：3作
不明：8作

(改題再版)
不明：3作

(作者不明)
天明元：1作
天明三：2作

(平成30年2月作成)

◇刊行年不明

書名 ※() 付は仮題	よみ ※() 付は仮題	角書 ※() 内はルビ	作者署名	画工署名	板元	袋入(丁) 巻/冊
姉二十一妹恋智	あねはにぢういちいもとのこひむこ		可笑作	清長画	岩戸屋	二/二
今昔化物親玉	いまむかしばけもの、おやたま		可笑作	清長画	岩戸屋	二/二
(東都銅訛天神記)	(あどなまりのてんじんき)		可笑戯作	なし	不明	袋入 (五丁)
江戸紫二度色揚	あどむらさきにどのいろあげ	女郎(しよらう)の実情(まこと)町人(てうにん)の男氣(おとこぎ)	可笑作	なし	西村屋	五/五
鎌倉栄	かまくらのさかゑ	宇治名木(うちのめいぼく)甲州名橋(かうしうめいきやう)	可笑作	画工北尾政演	岩戸屋	五/五
絹川物語	きぬかわものかたり	祐天和尙(ゆうてんおせう)念仏功力(ねんぶつのかうりき)	可笑作	清長画	岩戸屋	三/三
(金)			可笑作	春常画	不明	袋入 (十一丁)
(にた山そが)	(にたやまそが)		可笑作	恋川春町画	不明	三/三
化物一代記	ばけものいちたいき		可笑作	清長画	西村屋	五/五
(交雑講釋)	(まぜこぜこうしゃく)		可笑作	なし	不明	五/五
見越入道一代記	みこしにうどういちだいき		可笑作	清長画	岩戸屋	五/五

◇作者署名なし(後年の資料で可笑作とされるもの)

書名 ※() 付は仮題	よみ ※() 付は仮題	角書 ※() 内はルビ	作者署名	画工署名	板元	袋入(丁) 巻/冊
菊壽盃	きくじゆのさかつき	おとしはなし	なし	北尾政美画□※□は印「さん」	村田屋	三/三
早速具三右衛門	さそくさんゑもん		なし	北尾政美画	村田屋	二/二
玉のはる	たまのはる	落(おとし)咄(はなし)	なし	なし	村田屋	二/二

可笑作品数： 38作
※作者署名なし3作と改題再版3作を除く。

清長：20作
政演：6作
政美：5作
春町：1作
春常：1作
なし：5作

(作者不明)
政美：2作
なし：1作

岩戸屋：17作
西村屋：13作
伊勢治：3作
松村：1作
不明：4作

(改題再版)
岩戸屋：1作
西村屋：2作

(作者不明)
三卷三冊：1作
二卷二冊：2作
村田屋：3作

二卷二冊：14作
三卷三冊：18作
五卷五冊：3作
袋入：4作

(改題再版)
五卷五冊：3作